

Title	La Revolution francaise (F. Funck-Brentano); Vie de Napoleon (Jacques Bainville) Flammarion (1935)
Sub Title	
Author	平山, 榮一 (Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.15, No.4 (1937. 2) ,p.187(699)- 188(700)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370200-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

La Révolution française (F. Funck-Brentano) ; Vie de Napoléon (Jacques Bainville) Flammarion (1935)

Voir et Savoir といふ大衆向輸入叢書の中、大革命とナポレオンを取扱つた表題の二冊の小著は、限られた範囲内に於てそれ／＼の題目につき概括的ではあるが明瞭な概念を會得せしめるやうに極めて巧妙に編輯されてゐる。

先づ『大革命』に於ては、中世より近世にわたる多くの著作を以て有名な史家ファンク・ブランタン氏が生彩ある麗筆を以て革命の全貌を描寫する。革命の原因についても、アンシアン・レジームが全くの悪弊の集積ではなく、フランスは革命前に於て種々の方面に進歩に向つてゐたこと、言論の自由は必ずしも束縛されず、寧ろその自由なりしことが思想上の進歩を導き革命を促進したること、逮捕狀の制度も一七八四年以來全廢されてゐたことなどを述べ、また革命は専制政治に對する人民の反抗からといふよりは寧ろ専制制度の内部に於ける衝突（王權とパルマンの抗争など）より起る權力の失墜に基づくと種々の新味に富む敘説

が多く、啓發される所が多い。次いで革命の進行、憲法の問題、權力の推移、經濟問題、社會問題など重要事件は大抵洩らさず觸れてゐる。一々の事件に詳細な日附を入れて年代の關係を明確にし、簡明といへども無味に失せず、同時代の人々及びアメリカ人などの見聞録を挿入して敘述に眞實味と生彩を添へ、興味の盡きない筆法は小冊なりとも流石に大家の作と背かせる。豊富な挿繪は單なる挿繪の域を脱し、細字の説明を附して本文を補ひ、繪と文の兩方を以て敘述が完結するやうに編輯せられ、革命の部は、ボナパルトの有名なブリュメールのクー・デター（一七九九年十一月九日）を以て終つてゐる。

『ナポレオンの一生』は、等しく右翼の史家として著名なペンヴェイル氏の筆になるもので、敘述の體裁形式は前者と同一であるが、前者の生彩に比し、幾分地味な表現が感ぜられる。ナポレオンの家系から筆を起し、修業時代、初期の活躍など興味深く述べられ、始めの部分は前者と重複し、圖版など二三同一のものが見出されるが本文はこの方が遙かに詳細である。なほ一七九五年、ヴァンデミエール十三日の暴動鎮壓が、前者では通説の如く十月五日となつてゐるが、ペンヴェイル氏のこの書では十月四日と誤記されてゐる。ナポレオンの華々しい活躍は永久にフランス人の誇りであるらしく、この邊の描寫は流石に美事で、鮮麗な挿繪と共に充分に興味深い。しかし、ナポレオンが對イギリス政策に於て自力を過信したること、ロシヤ大敗後も同盟諸國の敵勢を輕視したることなど、見逃がされてゐない。ナポレオンの退位後の最後の生活など珍らしい繪を入れて詳細に説明し、ナポレオンがフラン

スの國民的英雄である所以も明かにされてゐる。如何に王黨側の史家であるからといつて本邦の所謂忠君愛國者流の史家の様に史實を曲げようとする點がなくなつたゞ解釋上の觀點を異にするのは羨しい。

以上の二書は小冊子ではあるが大革命とナポレオン時代の概要を知るに好適である。のみならず、從來も *Encyclopédie par l'Image* 叢書中の *La Révolution française* (A. Alba); *Napoleon* (Ch. Moreau-Vauthier) (Lib. Hachette) といふ幾分小型の同種繪入小冊子が寧ろ他の側に屬する史家によつて出版せられてゐるが、それらよりも遙かに鮮麗なる挿繪と體裁の美しさに長所があり、フランスの歴史描寫の方法を知る上からも興味あり、有益なるものと信ずる。翻つて國史に於ても、かゝる普及的良書の出ることを冀はざるを得ない。價各五フラン五〇。(平山榮一)

瀬野馬熊遺稿

朝鮮史研究家として令名高かつた著者が昭和十年五月廿一日に長逝せられ、それを記念する爲朝鮮史編修會の同僚諸氏が、同氏が諸雜誌に發表せられた諸論文の中最重要なものを選び、菊版本文四七〇頁の大冊として發刊したものが即ち本書である。著者は篤實なる學風を以て鳴り、その最も得意とするところは半島の歴史を難解ならしむる黨争問題であり、また吾人にとつて興味深い日鮮關係史であつた。本篇に集められた諸論文の中「高麗惠宗朝の内亂」、「高麗妙清の亂に就いて」、「燕山朝の二大禍獄」、「朝鮮黨争の

起因を論じて士禍との關係に及ぶ」は前者に屬し、「倭寇と朝鮮の水軍」、「正統四年桃渚の倭寇に就いて」、「今川大内二氏と朝鮮との關係」、「正統癸亥約條に就いて」は後者の範圍である。是等の諸研究は何れもその發表當時我國の學界に功獻する所大であつた金玉の諸篇であり、今一冊に纏められて學徒の便宜此の上もない。我國の倭寇が朝鮮明の海岸を掠奪すること多年に汎りに拘らず文祿慶長の役に我水軍の敗れたのは何故であつたかといふことは少時國史を學んだ際胸中を往來した疑問であつたが、著者は大正四年史學雜誌に發表した「倭寇と朝鮮の水軍」の中に高麗朝の末年より季朝の初世にかけ、半島沿海の各道を暴れ廻つた倭寇が朝鮮の水軍を異常に發達せしめ、後半秀吉の軍が侵入した時之を阻止するに與つて力あつたことを證明し之に明瞭な解答を與へてを。歐洲の大陸を席卷した天才的英雄ナポレオンが後年敗退したのは永年の戰役に依りその戦法を敵に學ばれた爲であるといふ。絶えず邊境に武を用ひつゝある現代の我國策も他日隣國の防備を強化して往年の水軍の覆轍を踏むことなくば幸ひである。綿密な著者の考證的論文は、一見迂遠に似て實は現代の吾人に切實な教訓を與ふる所頗る多い。儒教的國家は今日東洋の再建を叫ぶ吾人にとつて範とすべき國家形態ではあるが、一面あまりに道義的主觀的に傾くことは些々たる學問的感情的差違から熾烈なる黨争の弊害を生みだす缺點を有してをる。黨争の原因は多々あるであらうが、東洋政治史の痛ともいふべき此の黨争問題の眞因を追求した本書の諸篇から他山の石と爲すべき教訓を見出だす所頗る多い。要するに本書は種々の見地より見て東洋史學史上有益な刊行